

自ら学ぶ教職員 活動報告書

グループ名 自ら学び自らの授業を高める会

テーマ「主体的で対話的な深い学びを生徒が実感できるような授業の創造」ができる，指導力の向上を目指す。

取組のポイント・成果

取組の内容とポイント

- ・全ての子どもたちに生きる力となる算数・数学教育に参加
 - ・実践交流会での他県の先生方との交流
 - ・筑波大学附属中学校研究協議会参加 ・筑波大学附属中学校研究協議会後の交流
- このグループに所属している若手の先生の多くが2校目を迎え、自分たちの授業において実践がある程度固まってきている状況にある。授業の流れや、指導案の作り方など「自己流」というものが生まれてきた。そこで、今年度は自身の指導の中に新たな視点を入れることで自分の授業の見直しを行いたいと考えた。そこで、他県の研究発表から様々なことを学び、それを互いに交流することで、生徒がより主体的に学んでいけるような授業づくりをしていきたいと考え、実践を行った。

成果

○指導案作成におけるポイント

- 筑波大学附属中学校では、生徒同士や生徒と教師の対話を細かな部分まで書いていた。そうすることで言葉一つひとつを精選したり、授業の流れを想定したりすることができることを学んだ。
- 指導案と大きく変わることなく授業が進むことから、事前の生徒の実態把握をきめ細やかに行わなければいけないことを実感した。

○ねらいを達成すること

- 参観した授業では、ねらいである部分をまとめる前に授業が終わってしまった。しかし、授業後の生徒の感想はとても充実したとのことだった。
- 様々な部分を想定していくなかで、教科担任が妥協を許さず、細かな部分までどうなっているのか問い返していた。扱わずに過ぎてしまうようなことでも生徒に考えさせ、話し合いをすることが生徒の充実感につながることを学んだ。

○魅力的な資料と場面設定

- 教科書には載っていない場面を想定し、授業を展開していった。しかし、教科書よりもさらに日常的な場面を取り出して考えさせていた。
- 生徒が疑問に感じたり、もっと考えたいと思ったりするような資料や教材、場面設定をして問題をつくることも大切であると感じた。
- 探究的な学習をさせるには、自ら考えて学ぶ場面と、教師から学ぶ場面の精選をすることが大切である。自分から学ばなければ、探究的な学習とは言えない。しかし、自分から学ぶためには、ある程度の知識を教えてあげることも必要であると感じた。

○様々な見方をして個人追究を行う

→「全ての子どもたちに生きる力となる算数・数学教育」の実践交流では、三平方の定理の授業が話題となった。高さを三平方の定理を活用して求めてから、体積を導く授業実践の際に、高さを求める際に三平方を活用するだけでなく、面積の関係性から高さを導き出したり、相似を活用したりして導き出す方法を生徒に提示し、考えさせていた。普段の授業では、机間指導を通じて発展的な考え方をさせたいときに生徒に提示することはあるが、生徒が自ら解法の手立てを選択し、答えを導くことで主体的な学習になると感じた。

○個に応じた指導の必要性

→「全ての子どもたちに生きる力となる算数・数学教育」の全体講演では、夜間学校の先生を招いて今までの実践について伺った。自分の学級にも「数学が苦手。」な生徒はもちろんいる。しかし、すべての子に算数・数学の魅力を伝えるのが私たちの使命だと考える。学習は「好き、楽しい」と感じなければ自主的には学ぼうとしない。だからこそ、個に応じた指導が必要である。生徒の興味を引くような導入、単元に関わる数学の小話、定着度に応じた学習をサポートするプリントなどの補助教材、これらを一人でつくるのは大変だが、何人かの教員でこれらの財産を共有し活用できるようにしていきたい。

今後の課題

授業の展開や指導案に関しては、自分の中でこのようなものという固定概念がある。筑波大学附属中学校での指導案はそれを大きく覆すものだった。

授業の展開では、少人数での交流などはなく、全体での話し合いをもとに進んでいった。生徒にとって身近な場面を仮定して考えさせ、ねらいを達成させるまでいかになくても真剣に考え抜かせることで、生徒は充実感を得ていた。ねらいを達成することも大切だが、生徒が主役となって活躍できる授業の在り方について考えさせられた。そのため、考えさせる場面と、教える場面の役割を考え、適切な時間を設けることの必要性を感じた。

指導案では、大まかな授業内容とその都度の生徒の反応を大まかに書き記すことが多かった。しかし、細かく書き出したものを指導案の主要な部分にすることで授業者が明確にイメージすることができる。そのためには、生徒一人ひとりの実態をしっかりと掴むことが課題であることを感じた。

実践を終えて、今後は市の教育研究会で今回学んだことを広めたり、定期的に会員の交流会を行ったりして各個人の実践を持ち寄り、共有化を図りたいと考えた。先にも述べたが、教材研究を個人が行うことももちろん大切である。しかし、学校の中に数学の先生が一人しかいないという状況が現在は多くなってきている。聴きたいことがあってもすぐに聴くことができないのが現状である。それを打破したのがこの研究会であり、今年度の取組だと感じる。若手の教員が自分の実践を持ち寄り、「あーでもない、こーでもない。」と言いながら議論を交わす。私自身、数学の話を数学科の先生たちと話しているときは本当に楽しい。そしてこの営みが生徒に還元されればなおさらである。授業を高めるためには、私たちが授業力を高めるほかない。この1年間で個々が学んだことをさらに互いに周知し合い、一人一人の授業力向上につなげていきたい。